



松坂屋コレクション

四季の美 — 夏の模様

平成28年5月28日(土)→8月23日(火) 休館日:7月15日(金)

前期:5月28日(土)→7月14日(木)／後期:7月16日(土)→8月23日(火)

開場時間:10時~18時 ただし、最終日8月23日(火)は17時閉場



人は、季節の移ろいとともに装いを替える。

この衣替えの習慣は平安時代からだが、当初は貴族社会で年に2回、冬装束と夏装束に替えるだけであった。それが江戸時代になると武家社会では季節に合せて綿入れ(冬)、袴(春)、帷子・单衣(夏)、袴(秋)を着用する年4回になった。

また、織物には、絹・木綿・麻などの生地や袴・单衣などの仕立てばかりでなく、冬は雪輪や枯山水、春は蝶や芽吹き・桜、夏は魚や流水模様、秋は菊や萩・紅葉など、四季折々にふさわしい模様がある。

また、世界中、衣服の模様は平面的な図案や形式的なプリントだが、日本は自然の情景にとけこむような自由なタッチで描かれている。

ここでは「松坂屋コレクション」の小袖、裂地の中から「夏の模様」を紹介、加えて江戸時代のスタイルブックともいべき雛形本も展示する。



衣 装 前期展示

●「源氏物語模様帷子」(江戸後期)

白地に「源氏物語」模様が描かれた帷子。腰にはあじさい、裾には蛍に団扇など、夏の風物詩を表す意匠である。左肩の大きく描かれた蝉は「空蝉」を示したものであろう。帷子は麻を用いた单衣のことと、麻は肌触りの爽やかさから夏の衣服の素材として好まれた。

(夏模様=蝉・蛍・団扇)



●「鵜飼模様单衣」(江戸後期)

透目(すき間)を作った絹織物の鼠組地に、鵜飼模様を表した夏の单衣の小袖。鵜飼とは暗闇のなか小舟にかがり火を焚き、鮎などの魚を寄せ、飼いならした鵜を操る漁で、夏の夜の風物模様である。今も岐阜県長良川や京都府宇治川などで行なわれている。

(夏模様=鵜飼)



●「宇治風景模様小袖」(江戸後期)

浅葱地に白上げで、宇治風景模様が細やかに描かれた小袖。浅葱の地色を宇治川に見立て、右袖には鳳凰堂、腰下には、鮎などが打ち上げられる漁の仕掛けの染、唄に知られる宇治の柴舟、宇治橋などが見える。飛び交う蛍が夏の景を表している。

(夏模様=蛍)



●「芦に翡翠模様小袖」(江戸中期)

濃萌葱色の紗綾地に白上げを基調とし、流水と声の叢を描き、翡翠を刺繡で表した友禅染の小袖。翡翠は四季を通して水辺にいるが、川辺に芦が生い茂る夏に最も多く姿を見せ、句では夏の季語とされる。

(夏模様=芦・翡翠)



※白上げとは糊防染や絞りなどで、模様を白く表す技法。



衣装

後期展示

◎「養老の滝模様小袖」(江戸後期)

薄藍色地に白上げ、色糸・金糸の刺繡により風景模様を表している。背から裾にかけて大きな滝が白上げで、酒を入れる瓢と杯、薪などが刺繡で描かれている。この模様は「十訓抄」「古今著聞集」に記されている養老の滝伝説がモチーフとなっている。流水の涼やかさと物語の世界が見事に融合した夏季にふさわしい小袖である。

(夏模様=滝)



◎「宇治風景模様单衣」(江戸後期)

透目(すき間)を作った絹織物の浅葱紺地に、白上げと刺繡で宇治の風景模様が描かれている。浅葱の地色を宇治川に見立て、右袖には鳳凰堂、腰下には宇治の柴舟、橋の中央部の張り出しを特徴とする宇治橋など名所が見える。小さく縫い取られた虫で、夏の景色を表している。

(夏模様=虫)



◎「滝に鉄線模様 小袖裂」(江戸初期)

滝と鉄線が、友禅染と色糸金糸の刺繡で描かれた小袖裂。滝は涼気から夏の季語とされ、鉄線とは中国が原産の夏期に咲く花で茎が細く堅いため鉄の線の名が付く。

(夏模様=滝・鉄線)



◎「大漁模様浴衣」(江戸後期)

木綿地に伊勢海老、河豚、鰐、蛸、鯛を散らし、その上に全面網目模様を施した浴衣。網目は漁などに用いる網を意匠化したもので、海辺の風物として描かれることが多い。網に掛かった魚を表した洒落た意匠である。

(夏模様=魚・網)



◎「波に貝模様小袖」(江戸中期)

寄せて碎ける波と貝がダイナミックに表された夏模様の小袖である。柔らかく光沢のある綸子地に右肩から左肩、裾から右腰にかけて、藍の型鹿子で波、紅の型鹿子と金糸色糸の刺繡で大きな帆立貝、金糸で海草を表している。

(夏模様=波に貝)

※型鹿子(摺印田)とは、型紙を用いて染料を生地に摺り、鹿子絞りのような模様を付ける技法。



◎「あざみ模様 小袖裂」(江戸中期)

柔らかく光沢のある地紋が浮かび上がる綸子地に、あざみを刺繡と型鹿子の技法で華やかに表した小袖裂。

(夏模様=あざみ)



雛形本

雛形本とは流行の小袖模様や意匠を描いた木版刷りの冊子。寛文期(1661~73)以降つくられ、江戸中期を最盛期として数多く刊行された。

江戸時代のスタイルブックともいいくべき小袖雛形本は、小袖の背面図を中心に、文様や技法、配色などを記すのが一般的な形式であった。

出版された総数については諸説あるが、再版を含むと200種弱ともいわれている。

松坂屋はその約半数を所蔵しており、コレクションとしては最大級である。



とうりゅうもようひながたやび
当流模様雛形宿の梅
享保15(1730)年
(夏模様=ほおずき・あざみ)



よせいひながた
余情雛形
元禄5(1692)年
(夏模様=夏川に小舟・かきつばた)